

第13回 優秀賞(銀の星賞)受賞作品

「春の野のアレックス」

神奈川県 横浜雙葉高等学校 2年 千石 芙紀子



賢治のまちから
全国高校生★童話大賞

春の野のアレツクス

神奈川県 横浜雙葉高等学校一年 千石 茉紀子

「ついに、ロボットを作ったんですね」

「いかが興奮した面持ちで私の家を博士が訪ねて来たのは、春の初めの暖かい日だった。

博士は、我が家に向こうに住むお隣さんだ。一年中家にこもって、難しい計算を解き、様々な工具を使って素敵な機械をつくっている。話す事は難しくてまだ一〇歳の私にはよくわからなかつたけれど、ここ数年間はずつとロボット作りに専念しているらしかつたので、私も秘かに楽しみにしていたのだ。

「すごいね博士、おめでとう」

私が拍手すると、博士は照れ臭そうに頭を搔く。と一緒に玄関先で博士を迎えていたお母さんも、嬉しそうに博士に拍手を送つた。私は小さい頃に父を亡くしている。人手の足りない我が家を心配して、博士は昔から何かとよくしてくれた。自分の新作——例えば全自动草刈り機などの便利な発明品を、「試用」という名目で長い間貸し出してくれるなど、とてもお世話になつているのだ。お母さんも、私と一緒に博士の研究をいつも応援していた。

「それで、度々申し訳ないのですが。そのロボットが実用的かどうか、試しに一緒に過ごしてみていただきたいんです」

これには、私もお母さんも二つ返事で了解した。博士のロボットなら、きっとすごい。

「どんなロボット?」

私が聞くと、博士は銀縁眼鏡を指で押し上げ、ちょっと誇らしげに笑つてみせた。

「僕の家に来て見てもううのが早いかな。……見に来るかい?」





博士の家は細かい工具で溢れかえっていた。机の上には大量の書類が散らかり、その書類もびっしりと計算式で埋め尽くされている。なるべく踏まないよう足元に注意を払いながら、私は慣れた足取りで歩いていく博士の背中を追う。部屋は薄暗くて見通しが悪いが、やがて私は部屋の奥に、博士の隣で静かに佇む大きな人影を見つけた。その影は人にしてはいささか大きく、二メートルくらいはあるのかもしれない。ごつごつした輪郭をみとめ、そこでやつと、私はその人影が博士の造ったロボットだと気づいた。

「どうかな」

ようやく博士の元にたどり着いた私に、博士が聞いた。私は思わず感嘆の溜息を漏らす。鈍く銀色の光を放つ大きな身体、人間よりも腕の比率は長い頭部には、橢円を横にした形の目、口には真一文字に線が引かれていた。頭や腕、足の接合部は黒い、硬いゴムのような素材で作られている。全体的に、いかにも「ロボット」という感じで角ばっているのに、その佇まいはしなやかで静かで、どこか私を安心させるものがあった。

「……すごい。すごくかっこいい」

私が興奮のあまり目を見開いて博士を見上げると、博士はロボットの背中をポンポンと叩いてみせる。

「何か命令してごらん」

どうやら、人の言葉が理解できるように造られているらしい。

「じゃあ、握手して！」

早速手を差し出していくと、これまで前を向いたままピクリとも動かなかつたロボットが、カクンと首を折り、私を見下ろした。そして無造作に、大きな手が私の手を握る。ひんやりと冷たい感覚が心地よかつた。

「握ってくれた！」

「面白いだろ？」

博士が私を見てにっこり笑う。自分の作品について話すときの博士は、いつも楽しそうだ。

「そのロボットは、マグマの中に入れたりしない限り、常に摄氏一六度を保つように造られているんだよ」「へえ、すごいね」



感心しながら私が手を引くと、ロボットも手を離した。同時に、また顔を上げて元の姿勢に戻ってしまう。ロボットだからだとわかつてはいるけれど、あつさりしたそのアクションに、何だかひどく気が抜けた。

「それでね。このロボットとしばらく一緒にいてほしいんだ。不具合があつたら、教えてくれるかい」

「うん、わかつた」

銀縁眼鏡の奥の目を科学者らしく光らせた博士に、私は大きく頷く。

こうして、私の家に新しく、無口な鋼の家族が加わったのだった。

新しい家族がやつてきたその次の日、私とロボットは、家の前の小さな野原で向かい合つて立つていた。

「あなたに、名前をつけてあげるね」

相変わらずロボットはこちらを見ず、前を向いて立つたままだ。今の台詞は命令ではないから、仕方ないといえば仕方ないのだけれど。

「こっちを見て」

とはつきり言えば、大人しくこちらを見てくれる。私はそれで満足し、「今日から、あなたの名前はアレックスだよ」

と胸を張つて彼を見上げた。

『アレックス』は、私の死んだお父さんの名前だつた。昨日、博士の家からロボットと共に帰つてきてからベッドの中で眠りにつくまで、いくつもの名前を考えた。誰かに名前をつけるなら、心のこもつた素敵な名前をつけてあげたい。一人で散々悩んだ挙句、結局最初に浮かんだお父さんの名前が頭から消えなかつたのだ。私が世界で一番尊敬している人の名前だから、心は充分すぎるほどにこもつてゐる。

「……」

もちろんのこと、ロボット一事アレックスは無言だ。しかし、しつかりと目を合わせてくれていて、充分に楽しい。

「私はクリスつていうの。よろしくね！」

手を取つて上下に激しく振る。それでも無反応なアレックスにたまりかねて、私は彼の胴体に渾身の力で飛び付いた。首にしがみつき、「肩車して！」と『命令』すると、ようやく動き始める。伸びた手がひよいと私をつまみあ



げ、軽々とその広い肩に乗せてくれた。それから、私に言われるがままアレックスは野原を縦横無尽に歩き回った。時折立ち止まって花を摘んだり虫を眺めたりしながら、春の野原を一緒に探索する。暖かな日差しに、摂氏二六度の金属の感覚が気持ちよかつた。彼の肩の上で足をぶらぶらさせながら、一日中、一人と一体で散歩を満喫した。

日々は飛ぶように過ぎていった。毎日、私は何をするのにもどこへ行くのにも、アレックスと一緒に歩いた。アレックスは表情がないし、口はあってもそれは形ばかり、動きはしないから意思の疎通（そもそも意思というものがない）もできない。こっちを向けと言わない限り、人形のように立ちつくして目も合わせない。ただ私に言われた事を言われたとおりに遂行しているだけなのだろう。でも、一緒にいるとなぜかとても落ち着くし、もしかしたら心はどこにあるのかもしれない、と思えてくる。一緒にいればいるほど、アレックスは本当の人間のように、愛しい存在になつた。

晴れの日は野原に出て遊んだ。花を摘んでその名前を教えてあげることもあれば、鬼ごっこをすることもあつた。アレックスは団体が並外れて大きい割に俊敏で、私は逃げ切れた事がない。博士曰く水に濡れるのは問題ないということで、近くの雑木林を流れる小川で水遊びもした。遊び心で、水をかけてくれと言つたところ、怒濤のように川水を浴びせられ、危うく溺^{おぼ}れかけたこともあつた。

雨の日は、本を読み聞かせたり、私の好きなピアノを弾いてあげたりした。本を読み聞かせるのにもまたたくさん問題がある。登場人物の台詞だ。例えば、人魚の話を読んでいた時。「この子の声を奪つてしまえ」という悪役の台詞に、例によつてまつすぐ前を向いて私の隣に座つていたアレックスが、ぐるりと私を振り向いた。（嫌な予感がする）と思つたときには、頼み事には忠実なあの大きな硬い手が、予感通り私の喉^{のど}に伸びてきていた。慌てて止めたから間に合つたけれど、もしかしたら本当に声を奪われていたかもしれないと思うと今でも少し怖い。でもその忠実さがまた面白くもあつた。

一人っ子で父のいない私には、アレックスと一緒に過ごす毎日は心から楽しくて幸せで、いつしか彼のことも、『一体のロボット』ではなく『一人の人間』として見るようになつっていた。



「……アレックスは、私の本当のお父さんみたいだね。私のお願ひ聞いてくれるもん」

私はベッドに腰掛け、隣に座るアレックスに話しかけている。夜寝る前に（一方的に）話すのもまた、私の日課の一つだった。

「……」

アレックスからはいつも通り無言の返事が返ってくる。無言でも、そこに何か意思に似たものが存在するような不思議な感覚を、最近頻繁に感じるようになった。……なぜだろう？ ちらりと横に座る本人に目をやり、さらにどこか以前と違う違和感を覚える。アレックスは私をただじっと見ているだけなのだが。

「あれ」私は思わず声を上げた。……アレックスがこちらを見ている？ 彼は今まで、私が頼まない限り自ら行動を起こすことはなかつた。目線についてもそうだ。でも毎回「こっち見て」と言うのは面倒だしいつの間にか忘れて、私はそれを長らく口にしていない。じゃあ、今アレックスは何も言われていないのに私に顔を向けたことだらうか？ ……しかし、アレックスのそういう自發的行動が何を意味するのか、まだ私にはよくわからなかつた。

（きっと、何かの偶然だらう）

そう思い、とりあえずは保留することにした。

あまりに毎日が楽しくて、アレックス貸し出しに「しばらく」という制限がついていたことも全く忘れていた。別れのない出会いはない、とよく言うけれど、ある日本本当に、あっさりとそれは証明された。

「そろそろ、ロボットーアレックスを返してくれないか、だつて」遊び疲れて帰ってきた、初夏の夕暮れの食卓。温かいオレンジ色に染まったダイニングテーブルにお皿を並べながら、お母さんが唐突に言った。私は合わせない。私は一瞬、黙り込んだ。まだ何も食べていないのに、喉が詰まるような感覚に襲われた。

「それ、博士が言ったの」



やつと絞り出した声は、情けないほど小さく、震えている。そんなことはわかりきつたことだけれど、どうしても信じたくなかった。

「そうよ」

お母さんからの返事も短く、どことなく表情も苦しげだ。今までの一三カ月くらいだろうが、毎日をアレックスと過ごし、今や本当の家族のように彼を慕っている私が、どれだけそれを受け入れ難いか、きっとよくわかつてくれているんだろう。……でも。

「明後日には、研究所まで連れてきてって」

「いや」

明後日なんて、突然すぎる。私は強く首を振った。何も言わず静かに、いつも私の側に佇んでいてくれたアレックスが、明後日にはいないなんて到底受け入れられない。かたくなに首を振る私に、お母さんは困った顔でお皿を並べる手を止めた。

「でも最初から、『じばらぐ』っていう約束だったでしょ？」

「私がアレックスを返したら、アレックスは別人の所に売られちゃうんでしょう。そんなの、アレックスがかわいそう」

そう強く言い返すと、お母さんは一瞬何か迷うような素振りを見せたのち、やがて重々しく口を開いた。

「アレックスはロボットだから、……他の人の所に行つても、寂しいとは思わないよ」

だからアレックスのことは心配しなくてもいいんだよ、……私をそう慰めようとしてくれたんだろうと思う。でも、そんなこと思つてもみなかつた。体中の毛が一気に逆立つのを感じた。

「……そんなことないよ」

言い返す自分の声は、もう完全に泣き声だ。心のない存在だつて、心から愛情を注がれればきっとどこかでそれを感じている。花だつて、心をこめて毎日水をあげて育てれば、大きくきれいに育つといつじやないか。それなら、ロボットだつて例外じやない。

まぶたの裏が、熱かつた。鼻の奥がツンとして痛くなる。さっきまでオレンジ色に染まつていたテーブルは、私の視界の中で歪んで、暗く、色あせた。



そこに座っているのが、たまらなく辛い。どうしようもなくなつて、私はダインシングを飛び出した。

寂しさと悲しさとやりきれなさと、色々な感情がないまぜになつて、俯いたまま庭に出た私を出迎えてくれたのは、夕日に照らされた長い影。私はその大きな影を見上げた。

「行こう、アレックス」

歩き出した私の後ろをついてくる足音一つ一つが、今は私の胸をきつく締めつける。辛うじて涙はまつげの手前だが、そう長くこらえられそうにもない。しばらく歩いて私は立ち止まり、野原の真ん中に、力なく座り込んだ。座つて、と呟くと、アレックスも大人しく私の横に腰を下ろす。私は両膝に顔をうずめ、隣に座る摂氏二六度の温もりに話しかけた。

「明後日ね、私とアレックスはお別れなんだって」

「……」

お馴染みの無言の返事。きっとまた前を向いたまま、「明後日」の方向を見つめているのだろう——そう思い何気なく横を見ると、思いがけず、アレックスはまたしても、私の顔をじつと見つめていた。もちろん、私は何も言つていないので。まるで本当に会話しているかのようだつた。

「……アレックス、私の言うことわかるの？」

私の問いかけに、返事が返つてくるわけはない。でもアレックスの横円の目は、他の誰でもない、彼の意思で、私を見ている。それだけで充分だつた。何とか留まっていた涙も、もうこらえきれない。堰を切つたようにとめどなく、熱い滴が溢れ出した。手でぬぐつてもぬぐつても、それは止まる気配を見せない。

「せつかく仲良くなれたのに、お別れなんて、寂しいよね……」

嗚咽の合間に、途切れ途切れに声を絞り出す。間もなく沈もうとする夕陽が涙に反射して、私の視界はきらきらと鮮やかなオレンジ色に満たされていく。

……そこへ、ふいに頭に硬い大きな重みが下りてきた。それが何なのか、一瞬分からなかつた。しかし隣を見れば、私の顔を覗き込むように首を傾げたアレックスの手が、私の方に伸びている。私の頭に乗せられているのは、まぎれもない、アレックスの大きな手だつた。



……ああ、そっか。ぼろぼろ涙をこぼしながら、私は呟く。寝る前に私の部屋でお話をしたときに、初めて自分で私と目を合わせてくれたこと。今こうして、泣いている私を慰めるように、頭に優しく手を置いてくれていること。今、やつと気付けた。

……アレックスには、心が生まれたんだ。

「博士、アレックスを貸してくれてありがとう」「あれから二日、アレックスとのお別れの日。

私は博士の家の前で、アレックスと一緒に、博士と向き合っていた。

「どうだった？」白衣のポケットに両手を突っ込んで、博士は相変わらずにこにこしている。私もつられて笑い返した。

「三ヶ月間、楽しかった。おかしいところも、一つもなかつたよ

「そうかそうか、それは良かつたなあ」

本当は、アレックスに行つてほしくはないけれど。私は斜め後ろに立つているアレックスを見上げる。

「アレックス、今日までありがとう」

返事はない。こちらを見てくれているかと思つたけれど、私の声が聞こえたのか聞こえていないのか、アレックスは最初に会つた時と同じく前を向いたままだ。最後の最後で何となく寂しい気持ちを抱きながら、私は『命令』した。

「博士の家に、帰つて」

……しかしながら、命令にも関わらず、アレックスは微動だにしなかつた。聞こえなかつたのかと思つてもう一度言うが、それでも彼は動かない。どこか悪くなつたのかと心配になつて、試しに「こっち向いて」と言えば、すぐにこちらを向く。だが、帰るように何度も言葉を換えて言つても、やはりアレックスは動こうとはしないのだ。すると、試行錯誤する私をしばらく傍観していた博士が、そこで突然笑い出した。私が驚いて、アレックスと向き合つたまま博士を見上げると、博士はゆっくり歩み寄つてきた。アレックスの前に立つと、その胴体をコツコツと手の甲で叩く。

「どうやら、僕がずっと夢見ていたことを、クリスちゃんは叶えてくれたよ



「元がほころんでいる。どういうこと？」と私が聞き返すと、博士は身体の後ろで手を組み、アレックスを見上げた。

「口ボットに一つだけ足りないもの……それが、心だよ。科学では、どうして創れないものもある。……クリスちゃんにこの口ボットを——今はアレックスだね、預けたときに、僕は実は、少し期待していたんだよ」

「期待？」

「そう。科学者としてこんなことを信じるのはおかしな話だけど……クリスちゃんなら、口ボットにも心を宿せるような気がしたんだ」

アレックスが帰りたがらないのは、他でもない、彼の意思であり、心だよ。博士はそう続けた。私は再度、アレックスを見上げる。彼も私を見ていた。思わず、笑みがこぼれる。

「これで、アレックスは完全になつた。僕の研究も完成した。……ありがとう、クリスちゃんは、彼と本当に仲良くしてくれたんだね」

博士はゆっくりと、私とアレックスを見比べた。そして、また口を開く。

「もう一つお願いがあるんだけど、いいかい」

「うん。……なあに？」

「……アレックスと、これからも家族として一緒に暮らしてくれないかな」

……一瞬、私は耳を疑つた。『研究の成果』として、回収するんじゃなかつたのだろうか。

思わず、私は博士の方に一步踏み出した。

「……ほんと？　いいの!?」

興奮して声を大きくした私に、博士は楽しそうに頷く。

「クリスちゃんと過ごして、これからアレックスがどう変わつていくのか、僕も是非知りたいんだ」

博士の言葉に、お腹の底から何とも言えない感情が湧きあがつてくるのを感じた。

「嬉しい！　ありがとう！」

半ば叫ぶように言い、嬉しさのあまり、後ろに佇んでいたアレックスを抱き締める。すると、アレックスの腕はゆっくり動いて、私の頭に大きな手を乗せた。博士が笑う。

賀治のまちから

高校生☆語彙大賞



日差しがだんだんと夏に近づいていた。頭に乗せられた大きな温もりに微笑んで、私はきたる夏に思いを馳せる。摄氏二六度の温もりを連れて、さて、次はどこへ行こうか。